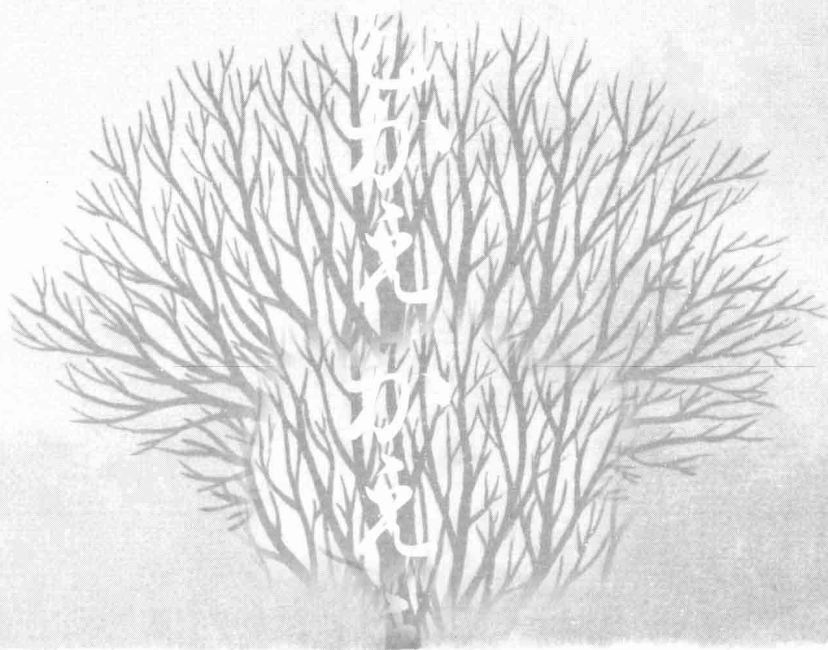


雪むかえ



冥王まさ子 著



冥王まさ子 著

雪むかえ

昭和五十七年十一月一日 初版印刷
昭和五十七年十一月十日 初版発行

著者 冥王まさ子

装画 三富誠一

装丁 スタジオ・ダバ

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 (〇三)四〇四―一二〇一〈営業〉

(〇三)四〇四―八六一一〈編集〉

振替 東京〇―二〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

©1982 MASAKO MEIO Printed in JAPAN

定価は帯・カバーに表示してあります
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

雪
む
か
え

ド
ク
ト
ル
・
ユ
キ
・
H
に

厚い雨雲の層をつき抜けようとするジェット機の巨体が羽虫のようにせつなげにふるえ、唸り、ときおり、雲の固い壁にぶつかりでもしたように、ずしん、ずしんと鈍い衝撃音を立てて垂直に落ちこむ。そのたびに胃を下から引き抜かれるような不快感が雪子を襲う。座席ベルトの上から両手でぎゅっと胃をおさえてむかつきに耐えていると、機体はますます激しく揺れて、雪子を振り落とそうとする。一人で落ちるのはいやだ、落ちるなら飛行機もろともだ、みんな一緒だ。雪子は抵抗して、座席ベルトにしがみつく。暗い雲にすっぽり包まれたジェット機は晴れた上空をめざして雲の切れ目をさぐりながらしだいに高度を上げ、不意を衝かれたような上下動を何度も繰り返す。そのたびに雪子は自分だけが席に縛りつけられたまま床ごと抜け落ちそうになるのを必死でこらえる。助けて、落ちるよう、苦しいよう、息ができないよう。

雪子は声にならない叫びを張り上げる。息が詰まる。落ちかけた雪子の身体をいつのまにか古びてくろずんだ綿のような雲がくるんでしまったようだ。

ごほごほと苦しい咳をしながら綿雲の中から這い出すと、母と妹が夕日の光を受けて金茶色に染

まった雲海の上に立つて、綿ぼりをかぶった雪子を見て笑っている。母が笑いながらさし出した手を借りてようやく雲海の上に立ち、はっとしたとき、雪子はまたはげしいむかつきに襲われた。男が一人、母と妹のうしろにぼんやり立っているのが見えたのだった。もやもやと輪郭の定まらない姿をしていて、誰か正体はわからない。昔知っていた男のようだ。父かもしれない。これでは釣合いがとれない、人数が多すぎてあぶない、と雪子とはっきり思い、そう思ったとたん、めまいに襲われて、身体が大きく揺れた。

ああ、落ちる。

自分の大きな叫び声に均衡を失い、雪子のはけぞり倒れた。雲の縁からとび出た身体が宙に浮いたと思うと、はるか下方にくろぐろとひろがる海にむかって雪子は落ちはじめた。奴隷のように身体が大の字に張って、頭が下になり、上になり、くるくる回りながら、すさまじい速度で落ちて行く。めまいとむかつきがひどくなる。このまま落ちて死ぬのだ、死ぬのはいやだ、こんなふうにして死ぬなんて、こわい。そう思う間も雪子の身体はおそろしい力で下へ下へと引っぱられる。しだいに近くなる海面が渦巻いて、円錐形の穴をあけ、雪子はその中に吸いこまれた。海水の壁がせばまってくる。波しぶきが男の腕のように首にからみつき、息苦しい。心臓が動悸をはやめ、そのはやさに耐え切れず止まりそうになる。落ちきったときが心臓の止まるときだ、雪子はそう観念する。恐怖が頂点に達し、ついに渦の底の闇に叩きつけられる、と思った瞬間、雪子は夢からはじき出された。

夢からはじき出され、暗がりの中で眼を醒ましたとき、雪子は夢からそのまま引きつがれた恐怖

が大波のように押し寄せ、頭にかぶさってくるのを感じた。身体が揺れている。たった今まで墜落を体験していた心臓がとくとくと鳴っている。手足が冷え、強ばっている。雪子は両手をそろそろと動かして胸に当て、心臓の高鳴りを鎮めようとした。だが、ますます鳴りをはやめる心臓に全身が呼応して揺れる。冷えが手足の先から心臓にむかって這いのぼり、それとともに身体がぐんぐん収縮する。ベッドにあお向けに寝ているのに、身体は底なしの闇にむかって落ちつづけ、背の下でベッドの固さが信じられない。

あたしは死ぬのだ、このまま身体が冷えつづけ、固く縮んで死ぬのだ。

強ばったままふるえる手を伸ばしてベッド脇のナイト・テーブルをさぐり、マタンドをつけると、その横の置時計が三時五分前を示していた。夜はまだ半分過ぎたばかりだった。朝までにはとうもなく長い時間があり、その間に自分が誰にも知られず闇の中に消えてしまうのだと思うと、雪子はおそろしくしてじっとしていられなかった。ベッドからはね起き、立ち上がってみても、身体は相変わらずどことも知れない方向に吸われるように落ちて行く。

一体あたしに何が起ろうとしているんだろう、もし死ぬのでないとすると、狂ってしまうんだろうか。

うろろろと雪子は部屋の中を歩き回ってみた。だが、そんなことをしても何にもならなかった。こんなふうになった一人で夜のただ中に閉じこめられているかぎり、何も起るはずがなく、どうにもなりはしないのだった。死の予感が大きく膨らむばかりだった。

一九七七年一月六日未明、あたしはこんなところであたった一人で死ぬのだ。そんなの、いやだ。

一刻もはやく助けを求めなければならなかった。雪子は動物の本能に似た的確さで行先を定めると、もつれる足で室内履きをひっかけ、バス・ローブはおらずに寝室からとび出した。寝室につづく居間を駆け抜け、ダイニング・ルームを駆け抜け、自分のアパートからとび出して、雪子は同じ階にある隣りのアパートのドアを夢中で叩いた。

誰？

固く立ちはだかるドアの向こう側から、距離の遠い男の声が響いた。ドナルドの声だった。雪子は左手でドアのノブをかたかた動かし、右手でドアを叩きつづけた。

あたしよ、ユキよ。ドアをあけて、はやく、助けて。

大股の足音が近づき、カチッという音がしてドアが開くと同時に、雪子は仄明るい内部にとびこんだ。ダイニング・ルームの奥の居間の片隅に光源はあった。ドナルドはこの時間まで起きていて、居間にある勉強机で本を読んでいたらしく、服も着替えていなかった。雪子のパジャマ姿に気がつくくと、ドナルドは重大事が起ったのだと察したようだった。

どうしたんだ、ユキ、何があったの？

あたし、死ぬのよ。こわくてこわくて。こんな死にかたをするなんて。

雪子はすがりつけるものを探して、せかせかと居間を歩き回った。

きみが、死ぬんだって？

ドナルドは心配すべきなのか笑うべきなのかを決めかねた表情で立ちすくんだまま、雪子の小動物のような動きを眼で追うばかりだった。

物音と人声で眼を醒まされたりしいバーバラが隣りの寝室から眼をしばしばせながら出てきた。四十に近いバーバラの眼のまわりが眠たげに幾重もの皺をつくっている。雪子の姿をみつけると、バーバラは出かかっていた欠伸をいそいでひっこめて、どうしたの、と訊いた。

ユキが死にそうだと叫びながら駆けこんできたんだ、とドナルドが説明した。

こわい夢でも見たの、ユキ？

また落ちる夢よ、と雪子はこぶしを握りしめた両手をふるわせていった。でも、今度は落ちるだけじゃなくて、死ぬのよ。死にかけて夢から醒めたら、もっとこわくなったの。心臓はどきどきするし、身体は揺れながらどこかに落ちて行くし、このままあたしは死ぬか発狂するかするんだわ。どうしよう、バーバラ。

バーバラとドナルドが看取ってくれるならもう死んでもいいのだ、という妙な安心感が雪子の恐怖をいくらかやわらげた。高い所から穴の中に落ちて行く夢を雪子は最近頻繁に見るようになっていた。だがいつもは夢から醒めてしまえば安全だった。こんなふうに醒めてますます恐怖に駆られるのはじめてだった。

バーバラは雪子の肩を抱いてソファに坐らせると、自分も隣りに坐って、幼児をあやすように雪子の背中をさすりながら、雪子が興奮してときれがちに喋る夢の顛末を、ときどき、うん、うんという頷きを入れて聴いた。聴き終るとドナルドにむかって、ユキはきつと不安発作を起したのよ、ほら例の、もうすぐおさまると思うわ、と落ち着いた声でいい、それから雪子を力づけようとしていった。

あたしも昔、一人で暮していた頃、よく不安発作を起して、友だちのアパートに駆けこんだり、電話をかけて助けを求めたりしたわ。でも安心して。この発作はどういうわけかびったり十分しかつづかないんだから。もう五分ぐらいは経っているでしょう。あと少しの辛抱よ。万一それでおさまらなかったら救急車を呼ぶなり何なりすることにして、ちょっとの間様子を見てみない？

あと五分の内に死ぬか狂うかしちゃうわ、と不安にとらえられたまま雪子は呻き声でいった。

大丈夫、この発作で死んだり発狂したりする人は一人もいないんだから、とバーバラはこの種の患者を扱いなれた看護婦のように笑いながらいった。

バーバラに雪子をまかせてほっとしたらしいドナルドは勉強机のかげから椅子を引っばってきて二人の前に据え、背を前にしてそれにまたがるように腰かけると、哲学的省察にふけるような表情で成行きをじっと見守った。眼を半ば閉じるとものうげなセント・バーナード犬に似てくるドナルドと眼が合っても、雪子は自分がつぎの瞬間どう崩れるかわからない不安に翻弄されていて、その親しみやすい顔にむかっていつものように口の端に微笑を浮かべてみせることができなかった。

バーバラの予告通り、五分経つか経たない内に雪子をせめたてていた恐怖は小壇に安全に閉じこめられた悪魔のように鎮まり、雪子は深夜に友人のアパートにパジャマ姿で駆けこんだ自分の醜態を恥じて冗談をいえるほどの人心地をとり戻した。ただ、おさえようもない死の恐怖をはじめて味わったショックが、もっと喋りたい、という欲求をかき立て、雪子をすぐに自分のアパートに戻る気にはさせなかった。

コーヒーか何か飲む、ユキ、と眠気をなくしてしまったバーバラが訊き、雪子の返事も待たずに

ドナルドに、お湯をわかつてユキとあたしにコーヒーを淹れてちょうだい、と頼んだ。

コーヒーじゃますます興奮して眠れなくなるんじゃないの、とドナルドが椅子からおり立って、台所に行きながらいった。ココアがいいよ、ココアにはカリウムが含まれているから気を鎮めるのに役立つよ。ぼくも頭休めに飲もう。

カリウムが気を鎮めるのに役立つの、といぶかし気なバーバラの声がドナルドのあとを追った。たしかそうだったよ、ちがっているかい？

さあ、どうかしら、知らないわ。

じゃ、ともかく牛乳をたっぷり入れるよ。牛乳のカルシウムは神経を休めるのにいいんだからね。あたしの人生はもう終わった、いつ死んでもいいんだ。それに諸行は無常、いずれ生はむなしものなんだから。投げやりにそう思いながら毎日を送っているのに、いざ死への墜落をまざまざと体験するとたちまちおびえて助けを求めに走るようでは、日頃の諦念なんていい加減なものだな、と雪子は苦く思い知った。だが雪子には、生への本能が自分に死をそれほど恐れさせたのか、それともバーバラのいう不安発作というのがそういう性質のものなのか、区別がつかなかった。もしかしたらそれは、死なずに夢から醒めてしまったこと、自分が存在することをあまりにも強く自覚したことが招いた不安なのかもしれない。

ドナルドが淹れてくれたココアが喉から食道をつたって胃に落ちるのが熱く感ぜられ、やがて胃から暖かみが身体中にやわらかくひろがって行ったとき、雪子は自分に我を忘れさせた恐怖の余波が、奇襲をやめたゲリラの最後の一兵のように意識の奥のどこにも知れない叢に消えてしまったの

をはっきり知った。皮膚にくるみこまれた自分の身体のどこからそれは湧いてきたのか、なぜそんな発作がとつぜん起ったのか、雪子には判断もつかなかった。

一人暮しがユキにはやっぱりこたえているんだよ、とドナルドが自分用の大きなマグに注いだコアを吸りながら誰にもなくいった。雪子が近頃穴に落ちる夢をしきりに見るようになって、ことを、ドナルドも折りにふれ聞かされていた。だからといって、ユキみたいな難しい人には簡単に解決策がみつかるわけがないけどな。

ユキは自分で選んでそうしているんだからどうしようもないのよ、とバーバラが相槌を打ち、それから雪子にむかっていった。ジョーダンとは別れてしまいうし、それ以来ボーイ・フレンドを作ろうともしないんですもの。あなたみたいな可愛らしい女性ならその気になれば何人でもボーイ・フレンドができて、不安発作を起したり、落ちる夢を見たりしなくてもすむかもしれないのに。

そんなの、関係ないわよ。

雪子は笑ってとり合わなかったが、もしこれからまたびこんな発作を起すとしたらわたしは自分を支えきれぬだろうか、とおぼつかない気持ちにさせられた。いったいあたしの知らない内部で何が反乱を企んでいるんだろう、あたしに何が起ろうとしているんだろう。

一人では心細いでしょうから、ソファでよかったら今夜は泊まっていちゃいよ、とバーバラが気遣ってくれるのを断って、これ以上バーバラたちを煩わさず一人で夜の残りをやりすごそうと自分のアパートに帰った雪子は、かすかなぬくもりをとどめているベッドにもぐりこんだが、あかりを消して元の暗がりに戻る気にはなれなかった。狭いアパートの寝室と書斎を兼ねたこの部屋

を暗くすれば、四隅から雪子をどこかにまた突き落とそうとする邪惡な手は何本も伸びてきそうだった。そういう闇の手をひそませているような部屋全体が、主であるはずの雪子に対してこっそりと陰謀を企みでもしているように、よそよそしい。

七年間住み馴れた部屋だった。ドアに近い白壁を背にした暗色の、時代がかったドレッサーに、レースのカヴァをかけたスツール、その隣りのがたつく衣裳だんす、向かい側の壁面いっぱいになった本箱、勉強机と椅子、白い紗のカーテンを吊し、ブラインドをおろした縦長の窓、その窓に面した、雪子が横たわっているアンティーク調の木製ベッドとナイト・テーブル、壁を飾る写真や額入りの絵やカレンダーやかさかさ乾いたブーケ、衣裳だんすの上の小物入れやインディアン形やぬいぐるみの動物たち、床に置いた観葉植物の鉢、そういうもののありかをにわか盲になっても困らないほど知りつくした雪子の長くなじんだすみか、蚕が繭を作るように自分の夢や願望や思い出を分泌してつむいだカプセルだった。ここに一人こもってしまえば、雪子はどういう人物であることも強いられず、自分が地球上のどこにいるのかを忘れることさえできた。それは日本でも、アメリカでもない、外界のどこにも属さない、雪子だけの、雪子に必要なだけの空間だった。この中で雪子は、雪子である自分とユキである自分を一つに溶かしてしまふことができ、眩きそのものになることができた。誰にも何にも侵蝕されていない昔ながらの雪子がめまぐるしく生きはじめ、愛の思い出にふけり、経過する時間の透明な壁を自在に出入りして、まどろみに似た自分の世界を織ることができた。部屋は一人で暮しはじめてからの七年間に雪子の自己としっくり同化し合っていた。

その部屋が今は、すみずみまで埋めつくす家具類や置物のおさまりのよい配置をがたがたと崩して雪子をはじき出すと、またいそいで元の位置に戻り、そ知らぬ顔で静寂の世界に退いてしまったように見える。雪子は自分の部屋が生気のない、無機質の本性をむき出して自分に背を向けたような気がし、ふいに抛りどころを失くしたような不安をおぼえた。まどろみからつき起されて、どういうわけでか今、ここに自分はある、という抽象的な感覚がめざめさせられたようだった。

夢のせいにちがいがなかった。落ちる夢には馴れていた。事実、このところ三晩もつづけて穴のような所へ落ちて行く夢を見ていた。だが、いつもは現実には吸い上げられるように眼醒めてしまえば、雪子は安全にベッドの中にいた。落ちて死ぬ夢を見て、眼醒めてもつとこわくなったのははじめてだった。おそろしい夢が不安発作というものの原因になったのか、それとも発作を起させるような無意識の恐怖が夢に表象されたのかは雪子にはわからない。雪子をあわてふためかせた恐怖感は何事もなかったようにおさまり、心臓の高鳴りも手足の冷えや強ばりも落ちて行く感覚もとうに消えて、ぶり返す気配はどうやららないが、不安を喚びさまたされた意識の方は逆に活発に働きはじめていた。

雪子の内奥で、こうしてはいられない、という焦燥に似た衝動が地鳴りをはじめ、雪子をまだどことも定まらない方向に駆り立てようとしているようだった。それにつれて、あたしはなぜこんなところにいるんだろう、という問いが頭の中をはつかねずみのように回りはじめた。部屋は静まり返っている。枕元の時計の規則正しく時を刻む音がそのリズムミカルな回転をしだいにはやめ、雪子は夢が捕獲網のように投げひろげた、部屋とは異質の空間に引きこまれて行くような心地がした。

それは自分の存在だけで成り立っていると思えないような空間だった。それはみるみる膨らみ、重さと嵩を増し、部屋をつき破ってひろがって行く。耐えがなくなつて、自分をかき消したいと思うのに、消したいと思えば思うほど、自分が、自分だけが今、ここに在る、という感覚が強まる。夜中にたった一人で眼を醒ましている場所がどこであろうと、雪子は今までさして気にならなかつた。一人きりの生活には馴れていたし、遠い昔からずっと一人でいたような気がしていたから、そこが何ものにも侵されないかぎり自分のいる場所にはこだわらなかつた。どの国に住んでいようと、どこを旅していようと、一人は一人、根本的には何のちがひもないのだった。あなたのような神経なら世界中どこに行つても平気で暮せるでしょうね、と人が雪子を羨んでいったほどだった。そして事実、雪子は長い間アメリカで一人暮らしをしてきたのだった。

眠れなかつた。雪子は自分が今、半夜の眠りよりもっと長い眠りから醒めかけているような気がした。アメリカに来てからも十一年以上も経ってしまったのだった。どこで暮そうと、所詮同じ一生なのだから、と雪子はその年月をこれまで長いとも短いとも思つたことがなかつた。だが、今、長い眠りから醒めかけてみると、それはとほうもなく長い年月であるような気がした。

われわれにとってアメリカは龍宮城みたいなものだ、居心地がいいからつい五年十年と住みついてしまふ、だがいつまでいたって何にもならないところだよ、とついこの間の正月に会つた知り合の日本人がいつていた。六十に近い画家だった。いつか日本に帰らねば、といいながら、その画

家はもう二十年も妻と二人でニューヨークに居坐っていた。雪子はその画家のアパートで昨年、今年とつづけて二度の正月を迎えたのだった。アメリカに目的があつて来たのならいいが、ただ漫然と何かを求めているだけではずるずると長居するだけで、一生を棒にふることになるよ、と画家は雪子や同じように自分を訪ねてくる若い日本人に忠告していた。

雪子はアメリカを居心地がいい所だとも、ここに長居すれば一生を棒にふると思っていない。この世で成就しなければならぬものがあるとは信じていないから、どこで生きようと雪子にとって一生は一生だった。母の実家や親戚が寺なので、現世への執着を戒め悔の雰囲気の中で育ってきたせいか、人はただ生きるだけでいいのだ、それ以上の欲はむなしなのだ、という諦念が自然に身についていた。居心地がいいからアメリカに十二年近くもいたのではない。どこに住もうと居心地は悪いものと決まっていた。居心地が悪くても生きていなければならないのがこの世だった。だから、最近のように暗い穴に落ちる夢が雪子を眠りから追いたてさえしなければ、自分のまわりにしつかりと方丈を築いて、一つの土地に長くどまつていられるはずだった。

はじめはほんの二、三年のつもりだった。息詰まる日本から逃げ出して、アメリカの大学にやってきたのは、雪子が二十五歳のときだった。世界史とアメリカ史を専攻し、修士号を取ったら帰国しよう、そう気軽に考えていた。だが、二年の学生生活が無事に、しかも夢見心地のうちに過ぎたとき、雪子は、ここで教えてみないか、と勧められ、もうしばらくいるのも悪くないな、と思ひ直したのだった。日本に帰ったところでこれといってするあてはないし、行き場もないし、ともかくもアメリカにいればすることがある、先のことは先になつて考えればいい、そう思ったのは二十代